

《論 文》

聖書に学ぶビジネス学

—— マタイによる福音書を中心に② ——

山 下 雅 弘

はじめに

神は「すべて」であり、「共に歩む存在」であると考えます。

本文では、聖書を論理的、現実的に解釈し、ビジネスに関係すると考えられる箇所を一部引用し、その直後に解説しました。他の視点も取り入れます。究極的には神のためになることが幸いです。

現代人は現代のルールに従うべきであり、差別には反対です。聖書の引用には、「新共同訳聖書」を用います。

本稿は、マタイによる福音書12章～28章を中心に扱います。

ルカによる福音書2章

16 そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。

実際に天使がいるとは考えられませんが、主の天使は野宿をしながら夜通し働いていた羊飼いたちの所に現われたということです。民に光を当てることからこのお話は始まっています。仕事に集中することは大切ですが、その上で視野を広げ見る所を変えますと喜びが見つかることがあります。素直な心で受け入れますと分かり得ることがあります。

クリスマスは、わたしたちが一つになれる時でもあり、愛されて生きていることを確かめる時でもあると考えます。また、クリスマスは、わたしたちの弱さや貧しさなどに光を当て、その中でもまたそれ故に豊かに与えられる良いものに目を注ぐ時でもあると考えます。

マタイによる福音書 12 章

28 しかし、わたしが神の霊で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ。

悪を悪の力で克服しようとしますとより悪くなる可能性があります。神の霊によって追い出しますと神の国になるようです。

神のような働きで悪を追い出さなければならないと考えます。良い心で悪いことを改めますと良くなると考えます。

マタイによる福音書 12 章

36 言うておくが、人は自分の話したつまらない言葉についてもすべて、裁きの日には責任を問われる。

つまらないことは言わない方が良いと考えます。いつか責任を問われます。

マタイによる福音書 12 章

38 すると、何人かの律法学者とファリサイ派の人々がイエスに、「先生、しるしを見せてください」と言った。

奇跡が起こることを確認しようとするよりお話を聞いて悔い改めることが大切であると考えます。

マタイによる福音書 12章 汚れた霊が戻って来る（ルカ 11 24-26）

43「汚れた霊は、人から出て行くと、砂漠をうろつき、休む場所を探すが、見つからない。

44それで、『出かけて来たわが家に戻ろう』と言う。戻ってみると、空き家になっており、掃除をして、整えられていた。

45そこで、出かけて行き、自分よりも悪いほかの七つの霊と一緒に連れて来て、中に入り込んで、住み着く。そうになると、その人の後の状態は前よりも悪くなる。この悪い時代の者たちもそのようになろう。』

悪い心でその場の状態を改善しましても、巡って以前より悪くなることはあり得ると考えます。

マタイによる福音書 13章

12持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。

基礎を身に付けることにより多くのことが理解でき生かせるようになると考えます。

マタイによる福音書 13章

14 イザヤの預言は、彼らによって実現した。

『あなたたちは聞くには聞くが、決して理解せず、見るには見るが、決して認めない。

15 この民の心は鈍り、

耳は遠くなり、

目は閉じてしまった。

こうして、彼らは目で見ることなく、

耳で聞くことなく、
心で理解せず、悔い改めない。
わたしは彼らをいやさない。』

人によってお話の聞き方が違います。イエスのお話は、心で理解し、悔い改めることができるお話です。聞き方が重要です。

見たこと、聞いたことを認め吟味し、改善のために役立てなければならぬと考えます。これをする人としぬい人とはますます差がつきます。たとえ話は意味を考えながら聞きますと理解できます。

わたしたちのためになる聞き方、捉え方をするこゝが重要であると考えぬます。

マタイによる福音書 13 章

23 良い土地に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて悟る人であり、ある者は百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結ぶのである。』

御言葉を聞きすぐに芽が出ましても本物かどうかわからぬこゝがあると考えます。迫害や富の誘惑などを乗り越えなければならぬと考えます。本当は富を求めていないかもしれぬません。富を増やそうとするより愛を増やそうとしますとより幸せになれるこゝが考えられます。

わたしたちは本当にやりたいこゝができますと良くなります。

マタイによる福音書 13 章 「毒麦」のたとえ

24 イエスは、別のたとえを持ち出して言われた。「天の国は次のようにたとえられる。ある人が良い種を畑に蒔いた。

25 人々が眠っている間に、敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて行つた。

26 芽が出て、実つてみると、毒麦も現れた。

27 僕たちが主人のところに来て言った。『だんなさま、畑には良い種をお蒔きになったではありませんか。どこから毒麦が入ったのでしょうか。』

28 主人は、『敵の仕業だ』と言った。そこで、僕たちが、『では、行って抜き集めておきましょうか』と言うと、

29 主人は言った。『いや、毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。』

30 刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。刈り入れの時、「まず毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は集めて倉に入れなさい」と、刈り取る者に言いつけよう。』

すべてを否定しますと良くなるものまで否定してしまう可能性があります。

ここで言われています天の国では、最初は悪い者と良い者の違いは明確ではありませんが、悪い行いをしていると悪い結果に繋がり、良い行いをし続ける人には良い結果が出ると考えます。わたしたちがすぐに排除しなくても後々結果は分かれることがあります。次第に違いが明確になっていくと考えます。

マタイによる福音書 13章

31 イエスは、別のたとえを持ち出して、彼らに言われた。「天の国はからし種に似ている。人がこれを取って畑に蒔けば、

32 どんな種よりも小さいのに、成長するとどの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て枝に巣を作るほどの木になる。」

救いや大きな効用が小さな悔い改めや言動からもたらされることがあると考えます。小さなことが大きな成果に繋がったり、元に戻せなくなったりすることがあると考えます。最初の一步は大切です。

マタイによる福音書 13 章

44 「天の国は次のようにたとえられる。畑に宝が隠されている。見つけた人は、そのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う。

45 また、天の国は次のようにたとえられる。商人が良い真珠を探している。

46 高価な真珠の一つ見つけると、出かけて行って持ち物をすっかり売り払い、それを買う。

畑は一見しただけでは宝が隠されているかどうかわかりません。隠されている宝を見つけることが重要であり、見つけましたら宝だけを買うのではなく宝を隠しながら畑を買うようなことが重要であるようです。宝を含む存在も一緒に評価すべきであるのかもしれない。

売手は、すべてをかけて得るような、一つの大切なものを探し求めることが理想であると考えます。一つの大切なものを売るためにすべてをかけることが重要であることがあると考えます。ビジネスをしましても、やがてその必要がなくなるぐらいのものを得られることが理想です。最も大切なものは売り買いだけでは得られないと考えます。

財やサービスは、価格が上昇し過ぎても売れなくなりますが、安く売ろうとするだけでなく付加価値を高めなければならないと考えます。

お金は貯めましても使うべき時には使うから大切なものが得られます。使い過ぎも貯め過ぎも良くないと考えます。適切に貯め使うことが大切です。ただ一つの大切なことをしなければなりません。

畑に隠された宝や高価な一つの真珠とは福音書の教えのことであると考えます。

マタイによる福音書 13章 天の国のことを学んだ学者

51 「あなたがたは、これらのことがみなわかったか。」弟子たちは、「分かりました」と言った。

52 そこで、イエスは言われた。「だから、天の国のことを学んだ学者は皆、自分の倉から新しいものと古いものを取り出す一家の主人に似ている。」

これらの教えの内容が分かりますと、学者は自分が持っているものの中から古く改めるべき所は改め、新しいものを生かすことができるようになると思います。

マタイによる福音書 13章 ナザレで受け入れられない（マコ 6 1-6、ルカ 4 16-30）

53 イエスはこれらのたとえを語り終えると、そこを去り、

54 故郷にお帰りになった。会堂で教えておられると、人々は驚いて言った。「この人は、このような知恵と奇跡を行う力をどこから得たのだろう。」

55 この人は大工の息子ではないか。母親はマリアといい、兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。

56 姉妹たちは皆、我々と一緒に住んでいるではないか。この人はこんなことをすべて、いったいどこから得たのだろう。」

57 このように、人々はイエスにつまずいた。イエスは、「預言者が敬われないのは、その故郷、家族の間だけである」と言い、

58 人々が不信仰だったので、そこではあまり奇跡をなさらなかった。

高い地位にある人の子でないと優れた力が出ないとは限らないと考えます。

同じ場所で同じ経験をしましても時には他人と違う見方をする必要であると考えます。

イエスは、自分を良く思わない、敬わない人々に対しては自分の力を発揮していません。相手を良く思うことにより力を引き出すことができることがあると考えます。

望ましい言動は、今いる所で受け入れられないからといってどこでも受け入れられないとは限りません。受け入れられない所で無理に力を出そうとするより他の所でやるのも一案です。

マタイによる福音書 14 章 洗礼者ヨハネ、殺される (マコ 6 14-29、ルカ 9 7-9)

- 1 そのころ、領主ヘロデはイエスの評判を聞き、
- 2 家来たちにこう言った。「あれは洗礼者ヨハネだ。死者の中から生き返ったのだ。だから、奇跡を行う力が彼に働いている。」
- 3 実はヘロデは、自分の兄弟フィリポの妻ヘロディアのことでヨハネを捕らえて縛り、牢に入れていた。
- 4 ヨハネが、「あの女と結婚することは律法で許されていない」とヘロデに言ったからである。
- 5 ヘロデはヨハネを殺そうと思っていたが、民衆を恐れた。人々がヨハネを預言者と思っていたからである。
- 6 ところが、ヘロデの誕生日にヘロディアの娘が、皆の前で踊りをおどり、ヘロデを喜ばせた。
- 7 それで彼は娘に、「願うものは何でもやろう」と誓って約束した。
- 8 すると、娘は母親に唆されて、「洗礼者ヨハネの首を盆に載せて、この場でください」と言った。
- 9 王は心を痛めたが、誓ったことではあるし、また客の手前、それを与えるように命じ、
- 10 人を遣わして、牢の中でヨハネの首をはねさせた。
- 11 その首は盆に載せて運ばれ、少女に渡り、少女はそれを母親に持つ

て行った。

12 それから、ヨハネの弟子たちが来て、遺体を引き取って葬り、イエスのところに行って報告した。

ヘロデ王は、自らの誕生日を祝う時に油断して不用意な発言をしたようです。欲しい物は何でもやろうと誓わない方が良いです。首をはねるのは非常に悲しいことです。してあげられる以上の物を奪われる可能性があります。誓いを破ってでもヘロディアの要求を断っていましたらヨハネの命は助かりました。多くの財産を獲得しそれを配分できるようになりましても問題が生じています。余裕綽綽の次に好ましい出来事は起こりませんでした。有り余る財産を持っていますと、適切な判断ができなくなるかもしれません。

国全体から見て裕福でもすべての人が満足しているとは限りません。ヘロデ王は全権を握っています。一人が全権を所有しますと、一人も幸せになれないことがあると考えます。組織が崩れていくことがあります。民間の黒字を急に吸い取るわけにもいきません。

富や権力を持ち過ぎますと、自分は何でもできると思いがちになると考えます。その驕りが不幸に繋がることがあると考えます。

十分に富を蓄えたり、財を買い揃えてしまいますと交換が減り不景気になると考えます。必死で新しさを開拓する中では高慢になる余裕はありません。

ヨハネの弟子たちはこの出来事を、イエスのところに行って報告しています。

マタイによる福音書 14 章 五千人に食べ物を与える（マコ 6 30-44、ルカ 9 10-17、ヨハ 6 1-14）

13 イエスはこれを聞くと、舟に乗ってそこを去り、ひとり人里離れた

所に退かれた。しかし、群衆はそのことを聞き、方々の町から歩いて後を追った。

14 イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て深く憐れみ、その中の病人をいやされた。

15 夕暮れになったので、弟子たちがイエスのそばに来て言った。「ここは人里離れた所で、もう時間もたちました。群衆を解散させてください。そうすれば、自分で村へ食べ物を買に行きましょう。」

16 イエスは言われた。「行かせることはない。あなたがたが彼らに食べる物を与えなさい。」

17 弟子たちは言った。「ここにはパン五つと魚二匹しかありません。」

18 イエスは、「それをここに持って来なさい」と言い、

19 群衆は草の上に座るようにお命じになった。そして、五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて弟子たちにお渡しになった。弟子たちはそのパンを群衆に与えた。

20 すべての人が食べて満腹した。そして、残ったパンの屑を集めると、十二の籠いっぱいになった。

21 食べた人は、女と子供を別にして、男が五千人ほどであった。

イエスは洗礼者ヨハネがヘロデ王に殺されたことを聞きこの話をしたとも考えられます。

実際に五つのパンと二匹の魚が、急に五千人分以上に増えたとは考えられません。実際は、五つのパンと二匹の魚を少数の人々に分けたと考ええます。少ない食べ物を分けて食べられる大きな喜びがあります。喜びを分かち合うことができます。余裕綽綽の人が盛大に宴会を行う状況とは違います。この奇跡的な発展は裕福な状態から始まっているわけではありません。

それぐらいでは少ない、何もできないと考えられることがあります。

全体として捉えますと遠い目標で達成が困難でも、足下の一步なら踏み出すことができ達成できることがあります。小さな差が大きな差に繋がることもあります。

近くにいる人に命を養う価値を与えることが好循環を生みます。近くの人を愛することが大切です。

同じ財やサービスでも、深く憐れみをもって提供しますと与えられる満足が大きくなります。財やサービスは、少量でも心を尽くして与えますと満足が大きくなります。好条件の付いた財やサービスを提供することが望ましいです。わたしたちが生み出せる付加価値にはこのようなものもあります。

イエスの教えは大きな満足を与え様々な所に通じると考えます。少量でも必要不可欠な教えを生かし応用して人々を導くことが大切であると考えます。「ここにはパン五つと魚二匹しかありません。」と言うことと「賛美の祈りを唱え」ることは反対です。感謝や賛美の祈りはプラス志向です。感謝する方が明るい未来に繋がると考えます。奇跡的な発展も、感謝することから始まると考えます。小さい利益を共に得ることが後に大きな利益に繋がると考えます。

奈良時代の人々が鉄などを自分だけで持たず自分のためだけに使わなかったためにできましたのが大仏であるとも考えられます。個人が利得を得ることだけを考えますと、自分の足場である組織が弱くなっていくことがあると考えます。聖書も大仏も、そのようにならないよう、またわたしたちがそれぞれに何かができると強く思うことによりつついばらばらになりがちな心を時には一つにするよう戒めているのではないかと考えます。財政再建のため政府が募金活動をするのも良いと考えます。寄付をされますと感動を与えます。

マタイによる福音書 14 章 湖の上を歩く（マコ 6 45-52、ヨハ 6 15-21）

22 それからすぐ、イエスは弟子たちを強いて舟に乗せ、向こう岸へ先に行かせ、その間に群衆を解散させられた。

23 群衆を解散させてから、祈るためにひとり山にお登りになった。夕方になっても、ただひとりそこにおられた。

24 ところが、舟は既に陸から何スタディオンか離れており、逆風のために波に悩まされていた。

25 夜が明けころ、イエスは湖の上を歩いて弟子たちのところに行かれた。

26 弟子たちは、イエスが湖上を歩いておられるのを見て、「幽霊だ」と言っておびえ、恐怖のあまり叫び声をあげた。

27 イエスはすぐ彼らに話しかけられた。「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない。」

28 すると、ペトロが答えた。「主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください。」

29 イエスが「来なさい」と言われたので、ペトロは舟から降りて水の上を歩き、イエスの方へ進んだ。

30 しかし、強い風に気がついて怖くなり、沈みかけたので、「主よ、助けてください」と叫んだ。

31 イエスはすぐに手を伸ばして捕まえ、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と言われた。

32 そして、二人が舟に乗り込むと、風は静まった。

33 船の中にいた人たちは、「本当に、あなたは神の子です」と言ってイエスを拝んだ。

実際に人が湖の上を歩けるとは考えられません。湖の上を歩こうとし

ない方が良いと考えます。しかし、逆風に悩まされ解決が困難な状況において、とことん状況が悪くなりますと意外に道が開けることがあるかもしれません。わたしたちは逆境で、自分たち以外の周囲の力のありがたさを忘れていることがあるかもしれません。そのようなことに気付くまでの距離が遠くに離れていることはあり得ます。考えを変えることが必要である場合があります。逆風も振り返って進みますと順風になります。

ペトロは、イエスの言葉によって安心し一度は歩み出そうとしています。30節のような状況に遭遇しますと恐れます。わたしたちは助けを求めることは大切ですが、助けを求めたからといって良くなるとは限らないことがあると考えます。助けを求めなくても、信仰を持ち続け困難であると思う状況に向き合いますと良くなることもあると考えます。この場合は最後には皆が助かっています。恐れや疑いを持つことで自分にも周囲にも不効用が生じることがあります。信頼を深めることは望ましいことです。

マタイによる福音書 15章 カナンの女の信仰（マコ7 24-30）

21 イエスはそこをたち、ティルスとシドンの地方に行かれた。

22 すると、この地に生まれたカナンの女が出て来て、「主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています」と叫んだ。

23 しかし、イエスは何もお答えにならなかった。そこで、弟子たちが近寄って来て願った。「この女を追い払ってください。叫びながらついて来ますので。」

24 イエスは、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところになんか遣わされていない」とお答えになった。

25 しかし、女は来て、イエスの前にひれ伏し、「主よ、どうかお助けく

ださい」と言った。

26 イエスが、「子供たちのパンを取って小犬にやっちはいけない」とお答えになると、

27 女は言った。「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」

28 そこで、イエスはお答えになった。「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように。」そのとき、娘の病気はいやされた。

ある目標を持ちますと、無意識のうちにそれ以外のことに冷たくなることがあるかもしれません。しかし、心を揺さぶるような必死さと大胆さによって人の心を入れ替えることがあると考えます。押しの強さが躊躇する人を揺さぶります。このような信仰もあると考えます。

小犬ばかりが大事であるわけではありませんが、対話によってさらに信仰を深めた人の子供はいやされます。「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように。」と言ってもらうことによって人をいやせるようになると考えます。

この人は、人間界も自然界の一部であることも理解できています。このような信仰もあると考えます。

マタイによる福音書 15章 大勢の病人をいやす

29 イエスはそこを去って、ガリラヤ湖のほとりに行かれた。そして、山に登って座っておられた。

30 大勢の群衆が、足の不自由な人、目の見えない人、体の不自由な人、口の利けない人、その他多くの病人を連れて来て、イエスの足もとに横たえたので、イエスはこれらの人々をいやされた。

31 群衆は、口の利けない人が話すようになり、体の不自由な人が治り、足の不自由な人が歩き、目の見えない人が見えるようになったのを見て

驚き、イスラエルの神を賛美した。

実際に31節のようなことが起こるとは考えられませんが、大勢の病人は、それぞれに病気による不効用以上の効用を与えられたと考えます。

わたしたちは苦しいことに直面しましても、その時以上の価値を生み出すように努められると望ましいです。

マタイによる福音書 15 章

36 七つのパンと魚を取り、感謝の祈りを唱えてこれを裂き、弟子たちにお渡しになった。弟子たちは群衆に配った。

37 人々は皆、食べて満腹した。残ったパンの屑を集めると、七つの籠いっぱいになった。

38 食べた人は、女と子供を別にして、男が四千人であった。

39 イエスは群衆を解散させ、舟に乗ってマガダン地方に行かれた。

最初に賛美や感謝がありますと後に大きな成果に繋がると考えます。

少しの財やサービスがあるとき、あるいは目標が達成できなかったとき、これだけしかないと考え不満点に注目し過ぎることがあります。しかし、少量の財やサービスでも過去の方々や周囲から与えられたものです。まずそれに感謝し、肯定的に考えますと次にそれを生かすことを考えることができます。一見役に立たないと思う物を生かすことが重要です。また、自分が持つ分が少量故に他人との絆を確立することができます。

物事を変えるとき、過去の方法の欠点に注目し改善しようと考えることがあります。しかし、良かった点まで失わないとも限りません。良かった点を認識し生かすことも重要です。

マタイによる福音書 16章 人々はしるしを欲しがる（マコ 8 11-13、ルカ 12 54-56）

1 ファリサイ派とサドカイ派の人々が来て、イエスを試そうとして、天からのしるしを見せてほしいと願った。

2 イエスはお答えになった。「あなたたちは、夕方には『夕焼けだから、晴れだ』と言い、

3 朝には『朝やけで雲が低いから、今日は嵐だ』と言う。このように空模様を見分けることは知っているのに、時代のしるしは見ることができないのか。

4 よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがるが、ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない。」そして、イエスは彼らを後に残して立ち去られた。

試そうとして奇跡を起こして欲しいと願うときには、いやしなどは得られないと考えます。

必死に願うときに得られる可能性があります。

マタイによる福音書 16章 ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種（マコ 8 14-21）

5 弟子たちは向こう岸に行ったが、パンを持って来るのを忘れていた。

6 イエスは彼らに、「ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種によく注意しなさい」と言われた。

7 弟子たちは、「これは、パンを持って来なかったからだ」と論じ合っていた。

8 イエスはそれに気づいて言われた。「信仰の薄い者たちよ、なぜ、パンを持っていないことで論じ合っているのか。

9 まだ、分からないのか。覚えていないのか。パン五つを五千人に分け

たとき、残りを幾籠に集めたか。

10 また、パン七つを四千人に分けたときは、残りを幾籠に集めたか。

11 パンについて言ったのではないことが、どうして分からないのか。

ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種に注意しなさい

12 そのときようやく、弟子たちは、イエスが注意を促されたのは、パン種のことでなく、ファリサイ派とサドカイ派の人々の教えのことだと悟った。

14章の13節～21節のお話におきまして、五つのパンを分ける状況では、実際に急に五つのパンが五千人分以上に増えたとは考えられません。15章の32節～39節のお話でも、実際に七つのパンが急に四千人分以上に増えたとは考えられません。実際は、パンを少数の人々に分けたと考えます。

多くの富を独占し配ってやるという状況からより、少ないパンを配るような状況から良くなっていくことがあると考えます。

高度な教えも基本の大切な教えから発展していきます。

マタイによる福音書 16章 イエス、死と復活を予告する (マコ 8 31-9

1、ルカ 9 23-27)

21 このときから、イエスは、御自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。

22 すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」

23 イエスは振り向いてペトロに言われた。「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。」

24 それから、弟子たちに言われた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。

25 自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。

26 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。

27 人の子は、父の栄光に輝いて天使たちと共に来るが、そのとき、それぞれの行いに応じて報いるのである。

28 はっきり言うておく。ここに一緒にいる人々の中には、人の子がその国と共に来るのを見るまでは、決して死なない者がいる。」

16章14節のイエスの「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」という問いに対し、ペトロは「あなたはメシア、生ける神の子です」という正解を出すことはできています。しかし、後にペトロは22節で「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」とも言っています。「生ける神の子」とはどのようなことを意味するのか理解する必要があります。

踏絵は踏んだ人も信仰が厚かったとも考えられます。忍従する中でより強くなっていける場合もあります。祈りは、忍従の日々を送ることもあります。

わたしたちは頭では理解していても実践できていないこともあるかもしれません。知っていることを現実に応用することが大切であると考えます。

自分を生かしたいと思うなら、自分を押し殺さなければならないことはあります。ビジネスを繁栄させたいなら、祈り続けることも必要かもしれません。

マタイによる福音書 17 章 イエスの姿が変わる（マコ 9 2-13、ルカ 9 28-36）

1 六日の後、イエスは、ペトロ、それにヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。

2 イエスの姿が彼らの目の前で変わり、顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなった。

3 見ると、モーセとエリヤが現れ、イエスと語り合っていた。

4 ペトロが口をはさんでイエスに言った。「主よ、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。お望みでしたら、わたしがここに仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」

5 ペトロがこう話しているうちに、光り輝く雲が彼らを覆った。すると、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」という声が雲の中から聞こえた。

6 弟子たちはこれを聞いてひれ伏し、非常に恐れた。

7 イエスは近づき、彼らに手を触れて言われた。「起きなさい。恐れることはない。」

8 彼らが顔を上げて見ると、イエスのほかにはだれもいなかった。

この部分はイエスが初めて死と復活を予告した直後に掲載されています。弟子たちは、イエスのことをモーセやエリヤと同様の方だとは思っていたかもしれませんが、しかし「「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」という声が雲の中から聞こえた。」後、最後にイエスだけが残って見えたと言います。イエスのことをモーセやエリヤと似た所があり救いをもたらしてくれる方だとは思っていましたがモーセやエリヤとは違うと意識するようになったと考えます。

わたしたちの間におきましても、ある時を境に人の見方が変わるこ

があります。わたしたちは死や復活を予告することはできませんが、特長を持ち、印象に残る言動を残すことはできます。

マタイによる福音書 17 章

20 イエスは言われた。「信仰が薄いからだ。はっきり言っておく。もし、からし種一粒ほどの信仰があれば、この山に向かって、『ここから、あそこに移れ』と命じても、そのとおりになる。あなたがたにできないことは何もない。」

実際に「もし、からし種一粒ほどの信仰があれば、この山に向かって、『ここから、あそこに移れ』と命じても、そのとおりになる。」とは考えられません。

しかし、少し変えますとその後の状況が大きく変わることはあると考ええます。

マタイによる福音書 17 章 再び自分の死と復活を予告する（マコ 9 30-32、ルカ 9 43b-45）

22 一行がガリラヤに集まったとき、イエスは言われた。「人の子は人々の手に引き渡されようとしている。

23 そして殺されるが、三日目に復活する。」弟子たちは非常に悲しんだ。

イエスはいつも自分が終わりに近づいていると考えて生きていますが、その終わりの後には新しく生まれ変わることができると考えて生きています。実際にはそのようなことは考えられません。命は大切にしなければなりません。

しかし、わたしたちは、いつも何かの終わりを生きていると考え大切に生きることや、何か悪いことや断絶がありましてもその後、新しい環

境が広がると考えて進むのが望ましいことがあると考えます。

マタイによる福音書 17章 神殿税を納める

24 一行がカファルナウムに来たとき、神殿税を集める者たちがペトロのところに来て、「あなたたちの先生は神殿税を納めないのか」と言った。

25 ペトロは、「納めます」と言った。そして家に入ると、イエスの方から言いだされた。「シモン、あなたはどう思うか。地上の王は、税や貢ぎ物をだれから取り立てるのか。自分の子供たちからか、それともほかの人々からか。」

26 ペトロが「ほかの人々からです」と答えると、イエスは言われた。「では、子供たちは納めなくてよいわけだ。

27 しかし、彼らをつまずかせないようにしよう。湖に行って釣りをしなさい。最初に釣れた魚を取って口を開けると、銀貨が一枚見つかるはずだ。それを取って、わたしとあなたの分として納めなさい。

神殿のような、国に建設する建物に使う税は、「ほかの人々」からだけではなくその国の国民が納めなければならないと考えます。国民が納める税はその国の自然の恵みによるものでもあり神のものでもあると考えます。税金は自国で賄うことを考えるのが基本であると考えます。

日本の財政再建のために海外の方ばかりを当てにするわけにはいきません。外国の方も含め時には日本が一つになることも大切です。

マタイによる福音書 18章

4 自分を低くして、この子供のようになる人が、天の国でいちばん偉いのだ。

偉い人は自分を高い所に置いて威張る人ではないようです。支配した

い人は皆に仕える人でなければならないようです。幼稚になるということではなく、大人が子供の性質の良い面を取り入れることにより良くなることがあると考えます。まだ好結果を出していないと思える人は自分を低くできる傾向にあります。そこに幸いがあります。

マタイによる福音書 18 章

14 そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない。」

羊は特徴の少ない弱い動物かもしれません。同様に、人間も神からは小さく弱い存在です。しかし、様々な自己主張をします。

多数決で決めますとその決定に少数意見は生かされなくなります。また、一人の意見をずっと採用し続けると、多くの人の意見が生かされないことがあります。時には少数意見を聞くことも必要であると考えます。

マタイによる福音書 18 章

19 また、はっきり言うておくが、どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心を一つにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。

わたしたちには目標を共有し一つになりますとかなうことがあると考えます。

マタイによる福音書 18 章 「仲間を赦さない家来」のたとえ

21 そのとき、ペトロがイエスのところに来て言った。「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までです

か。』

22 イエスは言われた。「あなたに言うておく。七回どころか七の七十倍までも赦しなさい。

23 そこで、天の国は次のようにたとえられる。ある王が、家来たちに貸した金の決済をしようとした。

24 決済し始めたところ、一万タラントン借金している家来が、王の前に連れて来られた。

25 しかし、返済できなかったので、主君はこの家来に、自分の妻も子も、また持ち物も全部売って返済するように命じた。

26 家来はひれ伏し、『どうか待ってください。きっと全部お返しします』としきりに願った。

27 その家来の主君は憐れに思って、彼を赦し、その借金を帳消しにしてやった。

28 ところが、この家来は外に出て、自分に百デナリオンの借金をしている仲間に出会うと、捕まえて首を絞め、『借金を返せ』と言った。

29 仲間はひれ伏して、『どうか待ってくれ。返すから』としきりに頼んだ。

30 しかし、承知せず、その仲間を引っぱって行き、借金を返すまでと牢に入れた。

31 仲間たちは、事の次第を見て非常に心を痛め、主君の前に出て事件を残らず告げた。

32 そこで、主君はその家来を呼びつけて言った。『不屈きな家来だ。お前が頼んだから、借金を全部帳消しにしてやったのだ。』

33 わたしがお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか。』

34 そして、主君は怒って、借金をすっかり返済するまでと、家来を牢役人に引き渡した。

35 あなたがたの一人一人が、心から兄弟を赦さないなら、わたしの天

の父もあなたがたに同じようになさるであろう。」

一万タラントンは六千万デナリオンに相当し、これだけの借金を主君は帳消しにしました。これは六千万日分の賃金相当額であり、一生かかっても返すことができない額です。非常に寛大な措置です。にもかかわらず、この家来は仲間の百デナリオンの借金を帳消しにしませんでした。こちらは返済可能な額です。

わたしたちの中には借金をしていない人が多くいますが、わたしたちは借金以外で多く赦されて生きています。非常に多く赦されて生きているのに他人のことは赦さない所があるのが人かもしれません。自分も多く赦されて生きていることを認識し、他人の赦すことのできることを赦さなければならないことがあると考えます。そこから良くなることも考えられます。

捕まえて首を絞めることはもちろん法的にも道義的にも赦されませんが、借金を返さなければならないことは、経済の観点からも法律の観点からも正しいことです。しかし、自分の方が多く赦されているかもしれないことを認識し直す必要があると考えます。教える内容は、経済や法律のみでは十分ではないかもしれません。それらの教えを支えるためにも大切なことがあると考えます。大学は社会科学だけでできるのではなく、過去からの教えも含め家庭教育や周囲に支えられてできると考えます。

このような教養もビジネス学に加えることが望ましいと考えます。

マタイによる福音書 19 章

5 そして、こうも言われた。「それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。

6 だから、二人はもはや別々ではなく、一体である。従って、神が結び

合わせてくださったものを、人は離してはならない。」

結婚に限らず、神の御心に適う祝福された心や言動の積み重ねが良い縁を引き寄せると考えます。

結婚や離婚は十分対話してからしなければならぬと考えます。様々な事情があり得ます。広い視野からよく考えなければなりません。

マタイによる福音書 19 章

12 結婚できないように生まれついた者、人から結婚できないようにされた者もいるが、天の国のために結婚しない者もいる。これを受け入れることのできる人は受け入れなさい。」

組み合わせによりましては良くなることはあり得ますが、無理に結婚しなくても良いと教えていると考えます。

マタイによる福音書 19 章

14 しかし、イエスは言われた。「子供たちを来させなさい。わたしのところに来るのを妨げてはならない。天の国はこのような者たちのものである。」

子供たちを大切にしなければなりません。子供たちはいやしや元気、気付きを与えてくれることがあります。

マタイによる福音書 19 章

16 さて、一人の男がイエスに近寄って来て言った。「先生、永遠の命を得るには、どんな善いことをすればよいのでしょうか。」

17 イエスは言われた。「なぜ、善いことについて、わたしに尋ねるのか。」

- 善い方はおひとりである。もし命を得たいのなら、掟を守りなさい。」
- 18 男が「どの掟ですか」と尋ねると、イエスは言われた。『『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、
- 19 父母を敬え、また、隣人を自分のように愛しなさい。』』
- 20 そこで、この青年は言った。「そういうことはみな守ってきました。まだ何か欠けているでしょうか。」
- 21 イエスは言われた。「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を作り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」
- 22 青年はこの言葉を聞き、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである。
- 23 イエスは弟子たちに言われた。「はっきり言うておく。金持ちが天の国に入るのは難しい。
- 24 重ねて言うが、金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」

わたしたちは自分を愛することも大切です。また自分が愛されているのにそれを退けて生きることもあるかもしれません。すべてが完璧だと思える人は目標を失い次にどうしてよいか分からなくなるかもしれません。やる事がなくなるかもしれません。たくさんの財産を青年のうちに手に入れているのに「先生、永遠の命を得るには、どんなことをすればよいのでしょうか。」と質問しなければならないということは、たくさんの財産を持つだけでは満足できず、もっと上を目指しているのかもしれない。その方法の一つが、「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を作り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」なのかもしれません。この青年は自分がたくさんの財産を持つことはできています。財産に限

らず、多く持った人が次になすべきことは与えることであると考えます。お金や物などを豊かに持っている人は貧しさを豊かに認識できないかもしれません。また、金持ちはお金を使わないと満足は得られません。必死になれません。金持ちは貧しい人に施すことによって苦悩が解消されるかもしれません。人にはそれぞれ強い部分と弱い部分があります。それらを補い合うことが大切です。強さの中に弱さを弱さの中に強さを見出さなければなりません。弱いと思う部分を補い合いますとお互いに幸福になれると考えます。

すぐにお金が儲からなくても、徳を積み、交換不可能でかけがえのない存在になることを目指す機会があると考えます。向上を目指し勉強や修練が必要である場合もありますが、それだけでは現状否定が続きます。現状を受け入れそこから適切な方に一步を踏み出すことが大切であると考えます。

イエスは去っていく人です。自分を犠牲にして教えようとしている人になら従って良いと考えます。

お金が少ないために頑張れることがあります。

マタイによる福音書 20 章 「ぶどう園の労働者」のたとえ

1 「天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。

2 主人は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。

3 また、九時ごろ行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、

4 『あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう』と言った。

5 それで、その人たちは出かけて行った。主人は、十二時ごろと三時ご

ろにまた出て行き、同じようにした。

6 五時ごろに行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、

7 彼らは、『だれも雇ってくれないのです』と言った。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言った。

8 夕方になって、ぶどう園の主人は監督に、『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と言った。

9 そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。

10 最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも一デナリオンずつであった。

11 それで、受け取ると、主人に不平を言った。

12 『最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにすると
は。』

13 主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。』

14 自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも同じように支払ってやりたいのだ。

15 自分のものを自分のしたいようにしては、いけないのか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。』

16 このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。』

このお話にも人知を超える内容があります。このようなお話は実際に社会では適用できないかもしれません。登場する労働者は、職業訓練をした期間や能力、勤労意欲などが異なるとは述べられていません。夜明

け、九、十二、三、五時ごろと段階的に雇用されています。夜明けから雇われた労働者と五時ごろまで雇われなかった労働者の違いは、後者は後まで雇われる機会がなかったことです。夜明けから雇われている労働者は早くから雇われることによって五時ごろまで雇われなかった労働者よりも既に恵まれています。五時ごろまで雇われなかった労働者は、最後までだれも雇ってくれないという苦勞をしています。このような苦勞と雇われたいという祈りが神からは仕事であるとも考えられます。最後まで祈り続けることが大切であると考えます。望み続けられることが大切なことです。夜明けから雇われた労働者と19章の金持ちの青年との共通点は、早くから、自分が良いことをしたと考えていることです。五時ごろまで雇われなかった労働者に雇い主は同じ賃金を先に与えています。

ここで言われています天の国には失業で生活が成り立たなくなることがありません。尤も、働きたいという勤勞意欲のある祈りがなければ見つけてもらえたかわかりませんし、このような寛大な配慮がなされるには限りません。しかし、計算によって賃金を決定することだけを考えれば十分ではなく、雇用に恵まれなかった人への配慮も必要です。早くから仕事ができない理由があるかもしれません。多くの人が生計を立てることができなければなりません。たくさん労働をしている人と五時ごろまで雇ってもらえなかった人との間に分け隔てがありません。お金を稼ぐ仕事を先にしてしましても、祈ることより価値が高いとは神からは必ずしも言えないと考えます。たとえだれも雇ってくれなくても祈り続けることは、神にとっては早くから雇用に恵まれた人と同じ効用があると考えます。すぐに結果を持とうとしなくても良い場合があるかもしれません。

能力に差がありましても人間以外の力も大切です。「雇われる機会がなくても主を信じて祈り、励みなさい。早くから雇われても雇われない

人のことも心にかけ励みなさい。不平に思っではいけません。養ってくださっているのは神ですから、これらのことを神のために行いなさい。」などと教えていると考えます。他人と比較しますと不満が大きくなることがあります。他人と比較しないことが大切であることもあります。

また、一日一デナリオンを超えて賃金を得ないことも幸いかもかもしれません。一日の労働でその日の生活費を賄うことができリスクがなければ不安もありません。お金には感謝しなければなりません、持ち過ぎますと、それ以外のものが不足する可能性があります。一日一デナリオンを超えた分を放棄しますと、他のものが得られるかも知れません。人間の基準では労働は利潤極大化を目指して行いやすいです。ここで言われています天の国ではぶどう園のような第一次産業でその日の生計を立てることができています。第一次産業で生計を立てられることも望ましいかも知れません。

経済格差は富める人も貧しい人も幸いにしないかも知れません。雇用に恵まれない人の危機意識が必要な改革を教えてください。仕事は多過ぎなくても困ります。雇用されていない人も仕事をしているかも知れません。仕事は神が与えてくださるものであり、神に仕えることでもあるという意識が必要であると考えます。

ここではお金で換算されていますが神から与えられる効用と考えますと、早くから働き効用を高めることは悪いことではありませんが、効用は最後には皆が同じくらいになると考えます。早く多く稼ごうとしましても最後は同じくらいになるかも知れません。早くから報われている人がさらに結果を出すことは難しいことがあると考えます。夜明けから雇われた人が一デナリオンより多く賃金をもらいますと、最後に雇われた人の賃金がなくなるかも知れません。このようなことを理解しますと、夜明けから雇われた人の不満は少なくなります。仕事は辛抱してするだけでなく感謝や使命感を持ってできるのが望ましいと考えます。独立に

別々に稼ぐことができるのではなく、周囲と共に稼ぐことができると考えます。

自分が考える仕事だけを仕事に据えていないか考えてみる機会になります。

マタイによる福音書 20 章

27 いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい。

王座の意味は、高い地位であると考えするというより、皆に仕えることであると理解すべきであるようです。

マタイによる福音書 20 章

34 イエスが深く憐れんで、その目に触れられると、盲人たちはすぐ見えるようになり、イエスに従った。

実際に盲人たちがすぐに見えるようになるとは考えられませんが、深く憐れんでもらうことにより大変いやされたと考えます。

マタイによる福音書 21 章 神殿から商人を追い出す (マコ 11 15-19、ルカ 19 45-48、ヨハ 2 13-22)

12 それから、イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いをしていた人々を皆追い出し、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けを倒された。

13 そして言われた。「こう書いてある。

『わたしの家は、祈りの家と呼ばれるべきである。』

ところが、あなたたちは

それを強盗の巣にしている。」

14 境内では目の見えない人や足の不自由な人たちがそばに寄って来た

ので、イエスはこれらの人々をいやされた。

15 他方、祭司長たちや、律法学者たちは、イエスがなされた不思議な業を見、境内で子供たちまで叫んで、「ダビデの子にホサナ」と言うのを聞いて腹を立て、

16 イエスに言った。「子供たちが何と言っているか、聞こえるか。」イエスは言われた。「聞こえる。あなたたちこそ、『幼子や乳飲み子の口に、あなたは賛美を歌わせた』という言葉はまだ読んだことがないのか。」

17 それから、イエスは彼らと別れ、都を出てベタニアに行き、そこにお泊りになった。

商売が否定された時と場所があったとのこと。そのような場合は転換しなければなりません。商売がいつでもどこでも悪いわけではありませんが、祈るべき時と場所では祈るべきです。イエスが行ったことを見て、子供たちに受けが良かったとのこと。他方、祭司長たちや律法学者たちは腹を立てたとのこと。ビジネスではできないことがあるかもしれません。ビジネスを始める前に祈りが必要であると考えます。

幼子は常に新しい体験をします。先の見えない不安定な存在です。幼子は成長過程で、好きなことに夢中になり物事の楽しさを追求します。同様に、新しく切り開くときは特に、仕事に充実感や使命感を持ち集中することが望ましいと考えます。経営を軌道に乗せることだけを中心に考えるより、その時にできる奉仕に集中することが重要である場合があると考えます。その中には後継者養成もあると考えます。

マタイによる福音書 21 章

22 信じて祈るならば、求めるものは何でも得られる。」

一瞬一瞬を大切に、一つずつ願いを叶え、望ましい言動をして生き

ることが大切であると考えます。求めるものはまだ得られていなくても後に得られると思える楽しみもあります。

マタイによる福音書 21 章 「二人の息子」 のたとえ

28 「ところで、あなたたちはどう思うか。ある人に息子が二人いたが、彼は兄のところへ行き、『子よ、今日、ぶどう園へ行って働きなさい』と言った。

29 兄は『いやです』と答えたが、後で考え直して出かけた。

30 弟のところへも行って、同じことを言うと、弟は『お父さん、承知しました』と答えたが、出かけなかった。

31 この二人のうち、どちらが父親の望みどおりにしたか。」彼らが、「兄の方です」と言うと、イエスは言われた。「はっきりしておく。徴税人や娼婦たちの方が、あなたたちより先に神の国に入るだろう。

32 なぜなら、ヨハネが来て義の道を示したのに、あなたたちは彼を信ぜず、徴税人や娼婦たちは信じたからだ。あなたたちはそれを見ても、後で考え直して彼を信じようとしなかった。」

わたしたちは諸条件の下で生かされています。まず受け入れる必要があることが多くあります。そこからそれらの条件の下で生きています。

最初に受け入れず後で考え直して出かけたとしても信仰に基づいて働いているとは言えないのかもしれませんが。別の基準に基づいて働いているかもしれません。まず受け入れることによって良くなると考えます。

わたしたちには自由はそれほど多くないかもしれませんが。しかし、わたしたちには奉仕をする自由はたくさんあると考えます。ビジネスに自由な奉仕を加えることでより豊かに自由になれると考えます。自由はわたしたちで作っていくものでもあると考えます。

マタイによる福音書 22 章

4 そこでまた、次のように言って、別の家来たちを使いに出した。『招いておいた人々にこう言いなさい。「食事の用意が整いました。牛や肥えた家畜を屠って、すっかり用意ができています。さあ、婚宴においでください。』』

5 しかし、人々はそれを無視し、一人は畑に、一人は商売に出かけ、

ここでは商売が良い意味では描かれていません。畑仕事や商売が不要であるということではありませんがこの場合は既に食事の用意が整えられ人々はそこに招かれています。既に与えられているにもかかわらず他の事を先にし、苦しい方へ向かわないようにしなければなりません。既に与えられていることを見つけ受け入れる方が望ましいことがあります。

自分がその時優先であると考えていることがベストな選択か考え直してみる機会になります。

マタイによる福音書 22 章

14 招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない。」

わたしたちが今与えられ恵まれている内容を認識しそれに対して相応しく応じることが重要です。それでこそ、チャンスをつかみ生かすことができます。選ばれるというのはエリートにならなければならないという意味ではないと考えます。

マタイによる福音書 22 章 皇帝への税金 (マコ 12 13-17、ルカ 20 20-26)

15 それから、ファリサイ派の人々は出て行って、どのようにしてイエ

スの言葉じりをとらえて、罨にかけようかと相談した。

16そして、その弟子たちをヘロデ派の人々と一緒にイエスのところに遣わして尋ねさせた。「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てなさらないからです。

17ところで、どうお思いでしょうか、お教えてください。皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか。適っていないでしょうか。」

18 イエスは彼らの悪意に気づいて言われた。

「偽善者たち、なぜ、わたしを試そうとするのか。

19 税金に納めるお金を見せなさい。」彼らがデナリオン銀貨を持って来ると、

20 イエスは、「これは、だれの肖像と銘か」と言われた。

21 彼らは、「皇帝のものです」と言った。すると、イエスは言われた。「では、皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」

22 彼らはこれを聞いて驚き、イエスをその場に残して立ち去った。

言葉尻を捉えたり、二者択一でどちらを回答しても不利になるような質問をされることがあり得ます。言葉尻を捉えるべきではありません。イエスカノーカで答えるべきでない場合があります。二者択一ではない中で新しさが生まれることがあるかもしれません。

皇帝でさえすべてを思い通りにできるわけではありません。納税の義務は国家のためでも神のためでもあると考えます。

国民から見て政治的には政府に権限があります。しかし、経済的に考えますと、借金のある国や地方も多いです。そのような国で、経済対策を国が国民に対して施すことが困難になることがあると考えます。政府といえども施しや権限には限りがあります。

経営者も労働者、国や地方、神の立場からも考え、労働者も経営者、

国や地方、神の立場からも考えることが求められることがあります。

マタイによる福音書 22 章

45 このようにダビデがメシアを主と呼んでいるのであれば、どうしてメシアがダビデの子なのか。」

イエスの宣教は、自身が滅ぼされていく中での活動です。ダビデのように政治や武力で世を治めたわけではありません。リーダーはあまり強過ぎなくても良いのかもしれませんが。

わたしたちも悪くなっていくと考えられる時の生き方が重要であり、それが未来を切り開くと考えます。

マタイによる福音書 23 章

4 彼らは背負いきれない重荷をまとめ、人の肩に載せるが、自分ではそれを動かすために、指一本貸そうともしない。

他人にさせるだけで自分は何もしないのではなく、自分で実行する必要がある場合があります。

マタイによる福音書 23 章

8 だが、あなたがたは『先生』と呼ばれてはならない。あなたがたの師は一人だけで、あとは皆兄弟なのだ。

実際には先生はたくさんおられます。わたしたちは、様々な問題に向き合い、多くの方々から学び続けられることが理想であると考えます。様々なことを学ぶことが大切です。またそれらは一つに繋がるかもしれません。

マタイによる福音書 23 章

13 律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。人々の前で天の国を閉ざすからだ。自分が入らないばかりか、入ろうとする人もも入れさせない。

理想的な社会を作ろうとする人の道を塞いではいけないと考えます。これしか方法はないと教えますと人々の新しい可能性を閉ざすことがあります。人間教育は後進に道を付けることでもあると考えます。

マタイによる福音書 23 章

16 ものの見えない案内人、あなたたちは不幸だ。あなたたちは、『神殿にかけて誓えば、その誓いは無効である。だが、神殿の黄金にかけて誓えば、それは果たさねばならない』と言う。

17 愚かで、ものの見えない者たち、黄金と、黄金を清める神殿と、どちらが尊いか。

18 また、『祭壇にかけて誓えば、その誓いは無効である。その上の供え物にかけて誓えば、それは果たさねばならない』と言う。

19 ものの見えない者たち、供え物と、供え物を清くする祭壇と、どちらが尊いか。

20 祭壇にかけて誓う者は、祭壇とその上のすべてものにかけて誓うのだ。

21 神殿にかけて誓う者は、神殿とその中に住んでおられる方にかけて誓うのだ。

22 天にかけて誓う者は、神の玉座とそれに座っておられる方にかけて誓うのだ。

「黄金と、黄金を清める神殿と、どちらが尊いか。」という問いには、

黄金を清める神殿、「供え物と、供え物を清くする祭壇と、どちらが尊いか。」という問いには、供え物を清くする祭壇という答えが適切であると考えます。

わたしたちは神殿の中にある黄金や祭壇の上の供え物など一部分だけを高く評価することがあります。神殿や祭壇すべてに価値を認める必要があります。物や金を含めそれらを生み出す元に感謝し大切にしなければならぬと考えます。

一部の学問だけを独立に突出して評価し主に据えることは望ましいとは言えないかもしれません。それらを支えることやバランスを学ぶことも大切です。

マタイによる福音書 23 章

26 ものの見えないファリサイ派の人々、まず、杯の内側をきれいにせよ。そうすれば、外側もきれいになる。

まず内面をきれいにすることが大切であると考えます。

マタイによる福音書 24 章

6 戦争の騒ぎや戦争のうわさを聞くだろうが、慌てないように気をつけなさい。そういうことは起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない。

7 民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に飢饉や地震が起こる。

8 しかし、これらはすべて産みの苦しみの始まりである。

9 そのとき、あなたがたは苦しみを受け、殺される。また、わたしの名のために、あなたがたはあらゆる民に憎まれる。

10 そのとき、多くの人がつまずき、互いに裏切り、憎み合うようになる。

11 偽預言者も大勢現れ、多くの人を惑わす。

12 不法がはびこるので、多くの人の愛が冷える。

13 しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。

14 そして、御国のこの福音はあらゆる民への証しとして、全世界に宣べ伝えられる。それから、終わりが来る。」

実際に世の終わりが来るとは考えられませんが、栄えたものが衰退する時は来ます。完璧だと思いう時から衰退が始まることもあるかもしれません。わたしたちの発展は立派さから始まるのではなく弱さから始まると思います。何かが減んでいくシナリオとして、まず悪いうわさが流れるかもしれません。その時慌ててはいけないようです。まだできることがあります、否定されるかもしれませんがすべきことをしなければならぬと考えます。

皆が利益を得ることだけを目標にしますと、多くの人から愛が減っていく可能性があります。そこは我慢しなければならない段階で、それから福音が伝えられる機会になると考えます。それから終わりが来るかもしれません。

マタイによる福音書 24 章 人の子が来る（マコ 13 24-27、ルカ 21 25-28）

29 「その苦難の日々の後、たちまち

太陽は暗くなり、

月は光を放たず、

星は空から落ち、

天体は揺り動かされる。

30 そのとき、人の子の徴が天に現れる。そして、そのとき、地上のすべての民族は悲しみ、人の子が大いなる力と栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見る。

31 人の子は、大きなラッパの音を合図にその天使たちを遣わす。天使たちは、天の果てから果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める。」

実際に太陽が暗くなったり、月が光を放たなくなったり、星が空から落ちたり、天体が揺り動かされたり、人の子が雲に乗って来るとは考えられません。

苦難のどん底の後には、良くなる兆しが生じると考えます。

マタイによる福音書 24 章

33 それと同じように、あなたがたは、これらすべてのことを見たなら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。

そのようなことがすべて起こりました末、道が開ける可能性が生じると考えます。

マタイによる福音書 25 章 「十人のおとめ」のたとえ

1 「そこで、天の国は次のようにたとえられる。十人のおとめがそれぞれともし火を持って、花婿を迎えに出て行く。

2 そのうちの五人は愚かで、五人は賢かった。

3 愚かなおとめたちは、ともし火は持っていたが、油の用意をしていなかった。

4 賢いおとめたちは、それぞれのともし火と一緒に、壺に油を入れて持っていた。

5 ところが、花婿の来るのが遅れたので、皆眠気がさして眠り込んでしまった。

6 真夜中に『花婿だ。迎えに出なさい』と叫ぶ声が出た。

- 7そこで、おとめたちは皆起きて、それぞれのともし火を整えた。
- 8愚かなおとめたちは、賢いおとめたちに言った。『油を分けてください。わたしたちのともし火は消えそうです。』
- 9賢いおとめたちは答えた。『分けてあげるほどはありません。それより、店に行って、自分の分を買って来なさい。』
- 10愚かなおとめたちが買いに行っている間に、花婿が到着して、用意のできている五人は、花婿と一緒に婚宴の席に入り、戸が閉められた。
- 11その後で、ほかのおとめたちも来て、『御主人様、御主人様、開けてください』と言った。
- 12しかし主人は、『はっきり言うておく。わたしはお前たちを知らない』と答えた。
- 13だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。』

不測の事態に適応して奉仕できるための準備を十分にしておくことは大切です。わたしたちには一瞬を逃したら利益を得られなくなることがあります。しかし、ここで愚かなおとめたちといわれています人たちが悪いわけではありません。

緊張し身構えて生きることと緩めて委ねて生きることが偏り過ぎないことが望ましいと考えます。わたしたちはバランスを取りながら生きることが大切です。

マタイによる福音書 25 章 「タラント」のたとえ (ルカ 19 11-27)

- 14「天の国はまた次のようにたとえられる。ある人が旅行に出かけるとき、僕たちを呼んで、自分の財産を預けた。
- 15それぞれの力に応じて、一人には五タラント、一人には二タラント、もう一人には一タラントを預けて旅に出かけた。早速、

16 五タラントンを預かった者は出て行き、それで商売をして、ほかに五タラントンをもうけた。

17 同じように、二タラントンを預かった者も、ほかに二タラントンをもうけた。

18 しかし、一タラントンを預かった者は、出て行って穴を掘り、主人の金を隠しておいた。

19 さて、かなり日がたってから、僕たちの主人が帰って来て、彼らと清算を始めた。

20 まず、五タラントンを預かった者が進み出て、ほかの五タラントンを差し出して言った。『御主人様、五タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに五タラントンもうけました。』

21 主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』

22 次に、二タラントンを預かった者も進み出て言った。『御主人様、二タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに、二タラントンもうけました。』

23 主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』

24 ところで、一タラントンを預かった者も進み出て言った。『御主人様、あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方だと知っていましたので、

25 恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントンを地の中に隠しておきました。御覧ください。これがあなたのお金です。』

26 主人は答えた。『怠け者の悪い僕だ。わたしが蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集めることを知っていたのか。』

27 それなら、わたしの金を銀行に入れておくべきであった。そうしておけば、帰って来たとき、利息付きで返してもらえたのに。

28 さあ、そのタラントンをこの男から取り上げて、十タラントン持っている者に与えよ。

29 だれでも持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。

30 この役に立たない僕を外の暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ざしりするだろう。』』

このお話では、ある主人が自分の財産を僕にそれぞれの力に応じ個別に預け旅行に出かけます。かなり日が経ち、五タラントンを預けられた僕は商売をして追加で五タラントン稼ぎ、二タラントンを預けられた僕は追加で二タラントン稼ぎ、主人に忠実な僕としてさらに多くのものを管理させてもらえる信用を得ています。ところが、一タラントンを預けられた僕はそれを地の中に隠しておいただけでした。預けられたお金を倍にした二人は忠実であり、生かそうとしなかった僕は役に立たないと叱責され地の中に隠しておいた一タラントンを取り上げられ、追加で五タラントンを稼いだ僕に与えられました。ここでは商売が良いこととして描かれています。商売は能力を増やすようにできると望ましいと考えます。商売をする中でそれまで持っていなかった小さな才能も身に付けていくことができることもあります。

元のまま持つておく人はそのお金まで追加でお金を儲けられる人に移転し格差が広がっています。貯めるだけでは大切なものが掴めないと考えます。

一タラントンを預かった僕は、それを投資するように努めなければならぬと考えます。自分の才能はたとえ自分が小さいと思っても、与えられたものでもあり周囲のために役立てなければならぬと考えま

す。

一タラントンはこの中で一番小さいです。他人と比較しないことができることも大切であると考えます。公共投資は有効であることも多いですが、現実にはその景気刺激効果は小さくなることもあるかもしれません。一人一人が小さい投資をすれば道が開けることがあると考えます。財産は能力を開発するために使うのが望ましいと考えます。小さい才能を生かすことも大切であると考えます。受けている量が大切なのではなく、受けているものを生かすことが大切です。このお話の状況を改善できます。安価なものの中に高い価値を見出しますと良くなります。また、そのような才能も小さくないのかもしれませんが。

それまでのやり方が否定されることはあります。すべきことをし、神のために自分を磨くことが望ましいと考えます。

マタイによる福音書 25章 すべての民族を裁く

31 「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。

32 そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け、

33 羊を右に、山羊を左に置く。

34 そこで、王は右側にいる人たちに言う。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。

35 お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、

36 裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』

37 すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢

えておられるのを見て食べ物差し上げ、のどが渴いておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか。

38 いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたでしょうか。

39 いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。』

40 そこで、王は答える。『はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』

41 それから、王は左側にいる人たちにも言う。『呪われた者ども、わたしから離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ。

42 お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせず、のどが渴いていたときに飲ませず、

43 旅をしていたときに宿を貸さず、裸のときに着せず、病気のとき、牢にいたときに、訪ねてくれなかったからだ。』

44 すると、彼らも答える。『主よ、いつわたしたちは、あなたが飢えたり、渴いたり、旅をしたり、裸であったり、病気であったり、牢におられたりするのを見て、お世話をしなかったでしょうか。』

45 そこで、王は答える。『はっきり言っておく。この最も小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことなのである。』

46 こうして、この者どもは永遠の罰を受け、正しい人たちは永遠の命にあずかるのである。』

受け継ぐものがある人は祝福されているようです。わたしたちは受け継ぐものによって養われています。

最も苦しんでいる人を救うことが大切です。最も不得意な部分を皆で補い合いますと厚生が高まります。他人に親切にしましてもやりました

と言わないぐらいが適切であるようです。自然にするのが望ましいと考ええます。

生前の行いに応じ天国に行けるか地獄に落ちるかが決められることを幼子のように素直に信じてみますとこの世で良い行いができるようになります。実際にはそのようなことはないかもしれませんが、世の中が良くなっていくと考えます。最後の審判など受けないと思いきる場合とでは結果が違うと考えます。

マタイによる福音書 26 章

12 この人はわたしの体に香油を注いで、わたしを葬る準備をしてくれた。

油は貴重な天然資源です。貴重なものを一部手放すような心構えが後の商売繁盛に繋がることがあると考えます。

ビジネスにおきまして価格を割引くことが必要な場合がありますが、時には追加的な価値を与えるのも良いかもしれません。そのときにしかできない奉仕をする価値は非常に高いと考えます。

相手を理解することが大切な場合もあります。

マタイによる福音書 26 章

25 イエスを裏切ろうとしていたユダが口をはさんで、「先生、まさかわたしのことでは」と言うと、イエスは言われた。「それはあなたの言ったことだ。」

「それはあなたの言ったことだ。」ということは、イエスがユダにあなたは自分で分かっているでしょうという意味で言ったと考えます。

マタイによる福音書 26 章

26 一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えながら言われた。「取って食べなさい。これはわたしの体である。」

最後の晩餐でイエスと食事を共にしました弟子たちはイエスの事を理解しておらず、最後には皆イエスを見捨てて逃げ裏切りました。しかし、そのような人たちにもイエスは功績などによらずパンやぶどうの実から作ったものを与えました。そのように都合よく生きる所がありますがなお愛され生かされているのが人です。ですからわたしたちは奉仕をする必要があります悔い改めやり直すことができます。

人間教育は優秀な人だけにすれば十分ではなく、多くの人の弱い所を認め合いそこから次の一歩を適切に踏み出すことを促すことも含まれると考えます。イエスの教えは血となり肉となることが望ましいと考えます。

マタイによる福音書 26 章

33 するとペトロが、「たとえ、みんながあなたにつまずいても、わたしは決してつまずきません」と言った。

自分だけは間違いないと考えるのは間違っている場合があると考えます。

マタイによる福音書 26 章

39 少し進んで行って、うつ伏せになり、祈って言われた。「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」

悲しい時、自分の意志だけで動かない方が良い場合があるかもしれません。自分の願いも大切ですが、「御心のままに」という感覚が望ましいことがあると考えます。

マタイによる福音書 26 章

52そこで、イエスは言われた。「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。

攻撃しますと自分も攻撃されます。平和が大切です。

マタイによる福音書 27 章

5そこで、ユダは銀貨を神殿に投げ込んで立ち去り、首をつって死んだ。

ずるをして得た金は自分のために使えませんでした。

マタイによる福音書 27 章 ピラトから尋問される (マコ 15 2-5、ルカ 23 3-5、ヨハ 18 33-38)

11 さて、イエスは総督の前に立たれた。総督がイエスに、「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問すると、イエスは、「それは、あなたが言っていることです」と言われた。

12 祭司長たちや長老たちから訴えられている間、これには何もお答えにならなかった。

13 するとピラトは、「あのようにお前に不利な証言をしているのに、聞こえないのか」と言った。

14 それでも、どんな訴えにもお答えにならなかったのも、総督は非常に不思議に思った。

「あなたが言っていることです」というイエスの言葉は四福音書すべてに掲載されています。人はすぐには評価できません。最後まで見ないと評価できません。特にイエスは声を聞き、生き方を最後まで見ないと、示そうとしていることに対する評価はできません。それまでの評価は「あなたが言っていること」です。人の見方がそのようになっているということです。

自分に不利な間違いの証言をされましたら普通は反論します。ここではピラトもイエスの対応を「非常に不思議に思っ」ています。後に理解してくれる人々が現れます。

マタイによる福音書 27 章 十字架につけられる (マコ 15 21-32、ルカ 23 26-43、ヨハ 19 17-27)

32 兵士たちは出て行くと、シモンという名前のキレネ人に出会ったので、イエスの十字架を無理に担がせた。

33 そして、ゴルゴタという所、すなわち「されこうべの場所」に着くと、
34 苦いものを混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはなめただけで、飲もうとされなかった。

35 彼らはイエスを十字架につけると、くじを引いてその服を分け合い、
36 そこに座って見張りをしていた。

37 イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王イエスである」と書いた罪状書きを掲げた。

38 折から、イエスと一緒に二人の強盗が、一人は右にもう一人は左に、十字架につけられていた。

39 そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって、
40 言った。「神殿を打ち倒し、三日で建てる者、神の子なら、自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。」

41 同じように、祭司長たちも律法学者たちや長老たちと一緒に、イエ

スを侮辱して言った。

42 「他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば、信じてやろう。

43 神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。『わたしは神の子だ』とっていたのだから。」

44 一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスをののしった。

イエスは自分を救うことしか考えない人ではありませんでした。

マタイによる福音書 27 章 イエスの死 (マコ 15 33-41、ルカ 23 44-49、ヨハ 19 28-30)

45 さて、昼の十二時に、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。

46 三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

47 そこに居合わせた人々のうちには、これを聞いて、「この人はエリヤを呼んでいる」と言う者もいた。

48 そのうちの一人が、すぐに走り寄り、海綿を取って酸いぶどう酒を含ませ、葦の棒に付けて、イエスに飲ませようとした。

49 ほかの人々は、「待て、エリヤが彼を救いに来るかどうか、見てみよう」と言った。

50 しかし、イエスは再び大声で叫び、息を引き取られた。

51 そのとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こり、岩が裂け、

52 墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。

53そして、イエスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に入り、多くの人々に現れた。

54百人隊長と一緒にイエスの見張りをしていた人たちは、地震やいろいろの出来事を見て、非常に恐れ、「本当に、この人は神の子だった」と言った。

55またそこでは、大勢の婦人たちが遠くから見守っていた。この婦人たちは、ガリラヤからイエスに従って来て世話をしていた人々である。

56その中には、マグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼベダイの子らの母がいた。

イエスは亡くなりましたが、最後まで自分の使命に忠実でした。神の子とは自分を救う人のことではありませんでした。

亡くなった多くの聖なる者たちが実際に墓から出て来たとは考えられませんが、イエスの生き方によって、そのような者たちの生前の言動が理解されるようになったと考えます。

マタイによる福音書 28章 復活する（マコ 16 1-8、ルカ 24 1-12、ヨハ 20 1-10）

1 さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行った。

2 すると、大きな地震が起こった。主の天使が天から降って近寄り、石をわきへ転がし、その上に座ったのである。

3 その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かった。

4 番兵たちは、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。

5 天使は婦人たちに言った。「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうか、

6 あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活な

さったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。

7 それから、急いで行って弟子たちにこう告げなさい。『あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。』確かに、あなたがたに伝えました。』

8 婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。

9 すると、イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。

10 イエスは言われた。「恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる。」

亡くなった人が実際に生き返るとは考えられませんし教えられません。そのように現実的に考えることは重要です。命は大切にしなければなりません。人が亡くなれますと悲しいです。しかし、この箇所はわたしたちが終わりだとか完成したと思う状況に直面した時の考え方に変化を与えると考えます。終わりだとかできたただけ思い続けていますと次に繋がるチャンスを見逃すことがあります。自分が正しいとだけ思うことを止めますと歩み寄ることができるようになります。断絶がある先に新しい環境が広がると希望を持ちますと新しい可能性に向かっていける力になります。そっくりそのまま状況が元に戻るのではないと考えます。また戻そうとするのではなく前向きに進まなければならないと考えます。終わりだと思えるからできることもあります。失うものがありましても新しい展開が生まれると考えます。次の課題に目を注ぐ必要があることもあります。

ビジネスは、すぐに利益を得ることを捨て、先を充実させる必要がある場合があると考えます。その時出ている利潤はゼロに向けて減るかもしれません。利潤を主に据えて見てはならないと考えます。不採算部門

から撤退することを考える必要があることがあります。退出を考える中で新たな道が開ける可能性もあります。何かを新しくすることにより新たな経済問題が生じ新たな経済学が必要になることがあります。日本の景気も世界の評価を受けます。仕事には奉仕の精神が大切です。損して得取るということがあります。長い目で見ますと、すぐに出ている結果は良いとは言えないかもしれませんが、悪いと思っていることが良い方に繋がることもあります。自分の思いと周囲の思いは異なる場合があります。人間同士の信頼を資本として重視することも考えられます。目先の利益を捨て奉仕を先に考えますと後に何かを残すことができると考えます。日本独特の終身雇用制やケイレツシステムなどは市場主義においては否定される部分があります。市場主義は優れた考えですが、このような家族型システムを形を変え形成していくことも大切であると考えます。

祈りは、人間の限界の力を超える働きを信頼することでもあると考えます。当然であると思うことを考え直してみることであると考えます。そのようなことで対話し絆ができることもあります。こうするしか手段がないか立ち止まって考えることでもあると考えます。わたしたちには振り返らないと見えない視界があります。後ろを振り向いたような所にチャンスがあることもあります。一歩手前の状態のまま頑張っていないか考え直してみることができます。平和も皆で祈り続ける中で築かれます。

何かを得るために何かを捨てなければならないことがあります。道が開ける前に苦しみがあるかもしれません。古さを捨てなければならない痛みがある場合もありますが、それによって道は開けると信じます。わたしたちの目標は一部分であることがあります。何かを失うことでより望ましいことに巡り合える可能性が生まれます。現状は第二希望の状態、本当に望ましい状態は現状を失った先にあるかもしれません。

悔い改めは長い大学の歴史における初期からの大切な教えの一つです。ビジネス学が進歩する機会がここに 있습니다。悔い改めはわたしたちが共に生きることに繋がると考えます。共に生きることは古くから考えられてきたことでもあります。

イエスのガリラヤから始まりました、他人を救い、感動を与えるお話が人々の心の中で今もなお生き続けています。

マタイによる福音書 28 章

12 そこで、祭司長たちは長老たちと集まって相談し、兵士たちに多額の金を与えて、

新しい展開に目を向けることが望ましいと考えます。

マタイによる福音書 28 章

18 イエスは、近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。

19 だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしてください。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、

20 あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

イエスの教えを学んだ上で、こうしよう、あるいはこうすることが望ましいという直感が聖霊の働きの一つであると考えます。何かを転換することによりムードが変わることがあります。

風の吹くまま気の向くままに適切な言動ができ、秩序を作っていくこともミクロ経済学に加えたいと考えます。

いつも世界中の平和を祈ります。

<参考文献>

- Alyce M. McKenzie, *Matthew*, Interpretation Bible Studies(Louisville, Westminster John Knox Press, 2002) 宮本あかり訳『マタイによる福音書』日本キリスト教団出版局 2010年
- John Dominic Crossan and Richard G. Watts, *WHO IS JESUS?* published by arrangement with HarperSanFrancisco, an imprint of HarperCollins Publishers, Inc. through Uni Agency, Inc., Tokyo 1996 飯郷友康訳『イエスとは誰か 史的イエスに関する疑問に答える』新教出版社 2013年
- いのちのことば社出版部翻訳『BIBLEnavi デイポーショナル聖書注解』いのちのことば社 2014年
- 加藤秀視『自分を愛する技術』徳間書店 2014年
- 越川弘英『十字架への道、復活からの道—レントとイースターのメッセージ』キリスト新聞社 2005年
- 中谷巖『資本主義はなぜ自壊したのか』集英社 2008年
- 日本聖書協会『聖書 BIBLE 和英対照 和文／新共同訳 英文／Today's English Version』2008年
- 日本聖書協会『聖書 新共同訳』2009年
- 林忠良『<生かされ>つつ<生きる>—よく生きる知恵：断章 98—』関西学院大学出版会 2013年
- 堀肇『弱さを抱えて歩む—聖書の世界に生きた人々【新約編】』いのちのことば社 2014年
- 山下雅弘「聖書に学ぶビジネス学—マタイによる福音書を中心に①—」奈良学園大学『社会科学雑誌』第10巻 2014年
- 渡辺勝弘『新約聖書講解シリーズ [2] マルコの福音書』イムマヌエル綜合伝道団出版局 1992年

ここまで導いてくださいました神に感謝いたします。